心肺蘇生法に神様は必要か？

「ヘルメス、下がって！」

　立ち上がったクレイオスに驚き、少しばかり硬直してしまったゼウスだったが、それも数秒のこと。すぐに我に返り、手の平を前に突き出しながら叫ぶ。

　しかし、遅い。

　クレイオスは大剣を取り出すと、一閃。

　この攻撃に、さほどダメージは発生しない。

　もとより、クレイオスにこれ以上戦うつもりはなかった。ヘルメスから受けたダメージで、もはやこの二柱に勝つことなど不可能だからだ。

　三十六計逃げるに如かず。クレイオスに出来るのは、これが精一杯である。

　大剣を振ったその風圧で、地面の土が巻き上がる。

　そんな中、どこからともなく電撃が一筋迸ってくる。

　恐らくはゼウスの攻撃だろうと容易に想像出来るが、クレイオスにとっては今はどうでもいいことだ。対象がしっかり見えていないが故に、体を軽く捻るだけでクレイオスはそれをかわす。

　そして、勢いよく空に飛んだ。

「小娘どもが……次はこうはいかんぞ！」

　クレイオスがそう叫ぶと、その背後に空間の歪みが出来上がる。

「ちょ、待てコノヤロー！」

　ヘルメスの叫びも虚しく、土煙がおさまる頃には、クレイオスの姿はどこにもなくなってしまった。

「……さま。瞬様！」

「ほらー、起きろー！」

　曖昧な意識の中でも分かる、体を揺すられる感覚と、やかましい二つの声。

　片方は聞き覚えがあるものの、もう片方はさて誰だろう。

　そんなことを考えながらも、俺は段々と自分が覚醒していくのを感じて、目をゆっくりと開いていった。

「……っ」

「瞬様！　大丈夫ですかっ？」

　体中が痛い。どうしてだろうと考えたが、すぐに思い出した。

「……おい、あのクレイオスって野郎は？」

「あー、ごめん！」

　答えたのは妖精モドキではなく、近くで立っていた女の子だ。

　彼女を最初に見たときの瞬の感想を一言で表すならば、「魔法少女か？」であろう。ただ、それにしては装飾が地味だ。いや形は派手なのだが、その色が。ピンクや赤らともかく、ベージュ色というのはどういう了見なのだろうか？　果たして彼女の趣味なのだろうか？

　そこまで考えてから、瞬は一番最初に聞くべきことを聞くために、口を開いた。

「おい、そこのあんた」

「ん？　私？」

「お前は誰だ？」

「あ、初めまして。ヘルメスでーす！　よろしくー！」

「おい、妖精モドキ」

「はい、何でしょうか？」

「この馬鹿っぽいのが言っていることは、本当か？」

「馬鹿っぽいとはなんだー！」

「お、落ち着いてくださいヘルメス様。ええっとですね瞬様……この方が仰られていることは本当ですよ？　彼女はヘルメス。捕らえられている七人の神様のうちの一人です。あの、そんなにいやそうな顔をしないでくださいって」

　いやだって、と瞬は口ごもる。

「ヘルメスって確か、商業の神様だろう？　商いってのは頭がある程度よくないと勤まらん気が……少なくとも、こいつに勤まる気がせん」

　瞬からはどう見ても、ヘルメスは『知的』というより『アホの子』の匂いがする。オブラートに包んだが、要するに『馬鹿っぽい』ということだ。

　刹那、自分の体の内側から蹴られるような感覚に襲われる。どうやら瞬の中にいる神も、瞬のその物言いに怒っているようだ。

　しかしである。瞬に言わせれば、こんなチャラチャラしている女を、そういう目でしか見ることが出来なかった。

　ヘルメスの方も「馬鹿っぽい」という自覚はあるのか、ぐぬぬと唸っている。

　が、今はそんなことを考えている暇ではない、と気がついたのか、ハッとした表情で、

「そ、そうだ！　クレイオスだけど、逃げられたんだった！」

「……なんだと？　おい、それは本当か？」

　瞬が妖精モドキを見ると、妖精モドキは申し訳なさそうな顔で頷く。

「ちっ、あの野郎。出来ればここで仕留めておきたかったんだが……」

「お、おにいさん、中々物騒な物言いだねぇ……」

「ったりまえだ。あの人を見下したような態度、ムカつく事この上ない」

「……まあ、それには同感かな？」

　ヘルメスは苦笑いしながらも、瞬の言葉に同調してくれた。

　それが少しだけ、瞬を嬉しくする。

　色々とアレなところはあると思ったが、それでも「ああ、こいつは味方なのか」と感じることが出来たからだ。

　口に出したヘルメスへの感想は、ネガティブなものだけだ。だが、瞬は直感的に、それよりももっと強く、ヘルメスから「戦えるやつだ」という感じがひしひしと伝わっていた。その感覚は、さっきのクレイオスよりも強い。

　瞬自身は絶対に認めないだろうが、きっと安心したのだろう。妖精モドキは戦闘においては頼りないし、これから先、瞬はどうやって敵と渡り合っていけばいいのか分からないでいた。

　そんな瞬にとって、ヘルメスの存在は、とても心強く思えたのだ。

「まあ、逃げちまったあの野郎のことは、後で考えるか……取りあえず、帰ろうぜ」

　瞬は、妖精モドキとヘルメスに向かって、そう言った。